

日系アメリカ文学の変容とヒサエ・ヤマモト

平石（稲木） 妙子

1. アジア系アメリカ文学の新たな潮流

1960年代の公民権運動に触発されたアジア系の人々が「アジア系アメリカ人」としての連帯意識に目覚め、それまで主流社会で不可視化されてきた自分たちの歴史や文化伝統を捉え直すアジア系アメリカ人運動が60年代後半に進展した。この運動と連動して、60年代末から70年代にかけてアジア系としての連帯や新たな文化の創出を求めて『ギドラ (Gidra)』(1969-74) や『ルーツ (Roots: An Asian American Reader)』(1971), 『カウンターポイント (Counterpoint: Perspectives on Asian America)』(1976) などの出版も相次ぎその後のアジア系アメリカ文学やアジア系アメリカ研究への発展につながった。⁽¹⁾

アジア系アメリカ文学において特に注目されたのは、1974年にフランク・チン (Frank Chin), ローソン・F・イナダ (Lawson F・Inada), ショーン・ウォン (Shawn Wong) ら若手作家の編集によるアジア系初のアンソロジー『アイイー！ (Aiiieeee!)』であった。このアンソロジーには従来、主流のアメリカ文学において注目されることもなかった中国系やフィリピン系、日系などの作家の作品が収められ、それぞれのエスニック・グループで文学活動を行ってきた作家たちをアジア系集団としてアピールする試みとして意義のあるものとなった。このアンソロジーによってアジア系アメリカ文学という新たなカテゴリーが形成され、アジア系アメリカ文学研究の発展の契機となった。

その後、エイミー・タン (Amy Tan) の『ジョイ・ラック・クラブ (Joy Luck Club)』(1989) がベストセラーとなったことが示すように、アジア系アメリカ文学が主流社会でも広く読まれるようになった。特に近年はアジア系アメリカ人も多様化がすすむにしたがって、従来の中国系や日系、に加えてコリア系やフィリピン系、ベトナム系などの作家も活躍するようになりアジア系アメリカ文学の裾野も広がった結果、アジア系アメリカ文学は旧世代の作家とは異なった新たな様相を示している。

パトリシア・チューの言葉を借りるなら、従来のアジア系アメリカ文学においては、「アジア的自己意識とアメリカ的自己意識との間の緊張関係」を描くことがアジア系作家の共通点だった (Chu 18)。日系文学についていえば、モニカ・ソネ (Monica Sone) の『二世の娘 (Nisei Daughter)』(1953) やジョン・オカダ (John Okada) の『ノーノー・ボーイ (No-No Boy)』(1957) などがその代表的な例である。アメリカへの帰属を求めながら、拒

絶されることで苦しんだり、生まれ育った国アメリカかそれとも親の出身国である日本か、という文化的な二者択一を迫られて葛藤する二世の状況が、それらの作品では描かれている。

しかし、1965年の移民法改正⁽²⁾により、アジア系移民の増加と多様化が進み、さらに一九八〇年代以後、多文化主義が進展するにつれて、アジア系アメリカ文学にも大きな変化が見られるようになった。典型的には、従来の同化主義から脱して、アジア系の歴史や経験を大きな視野から、他者との関係において捉えるトランスナショナルな作品が書かれるようになった。日系アメリカ文学でも、デイヴィッド・ムラ (David Mura) やカレン・テイ・ヤマシタ (Karen Tei Yamashita) などの作家が1980年代末から1990年代にかけて登場し、新たな注目を浴びる。これらの作家には、日系アメリカ人の経験や歴史を「日系文化やコミュニティとはほとんどもしくはまったく関係しないアイデンティティや共感を模索する」(Yogi 147) 点に、それまでの日系作家にはない新たな要素を認めることができる。これらの新世代の日系作家は、「多様なアイデンティティや場所、および一般的にポストモダンを特徴づける根無し草の感覚」(Yogi 147) に基づいて新たな物語を生みだしていった。

アジア系アメリカ文学の新たな潮流を示す作家として近年、よく挙げられるのがカレン・テイ・ヤマシタである。マジック・リアリズムの影響を受けたヤマシタは、超現実的な設定のもとで『熱帯雨林の彼方へ (*Through the Arc of the Rain Forrest*)』(1990) や『オレンジ回帰線 (*Tropic of Orange*)』(1997) において、特定のナショナル・アイデンティティに囚われることなく、文化的、社会的境界を横断するアジア系や現代の移民たちの流動性、越境性を描き、「グローバルな作家」(Ling 189) としてアジア系アメリカ文学に新たな息吹を吹き込んだ。

とりわけ、従来のヤマシタの作品とは異なった新たな視点に基づく野心作として評価されたのが『アイ・ホテル (*I Hotel*)』(2010) である。アイ・ホテルとは、サンフランシスコのマニラ・タウンにあった“International Hotel”の通称である。主としてフィリピン系の低所得の労働者たちや高齢者が住むアパートだったが、1968年にはホテルを所有していた会社が、駐車場を造成するため住民に立ち退きを通告した。これに対して、教会やアジア系のアクティヴストたちによる抗議運動が行われる。⁽³⁾ この作品では、撤去に対する抗議運動が行われた1968年からアイ・ホテルの住民たちが強制的に撤退させられた1977年までの激動の時期が多彩な語りを取り込みながら語られる。⁽⁴⁾ 物語は10章に分けられ、各章を独立した物語として読むことも可能で、フィリピン系、中国系、日系などをはじめとして多彩な民族が登場する。さらに、「あとがき」でヤマシタが述べているように (*I Hotel* 609-610)、膨大な歴史的資料収集や調査と、150名にも及ぶ人々とのインタビューなどをもとに、60年代後半に進展したアジア系アメリカ人運動や1969年から1972年までの先住民によるアルカトラズ島占拠などを通して、アジア系間のみならずアジア系と他のマイノリティとの関係が重層的に描き出されている。また、マルクス・エンゲルスや毛沢東、レーニン、マル

コム・X, フェルナンド・マルコス, リチャード・ニクソンなど, 次々に政治家や思想家の言葉が引用され, 読者の側も様々な知識が求められる挑戦的な作品でもある。

文学作品については, 英米の古典的作家に加えて, ジョン・オカダやフランク・チンなど, アジア系アメリカ文学の代表的な作家について触れられ, アジア系アメリカ文学創成期の状況も知らされる。章ごとに時代の推移をおいながらも, アメリカ国内の社会状況のみならず広島原爆投下などにも言及され, 国家横断的で過去と現在とを行き来する多様な声のせめぎ合いを通して生み出されるダイナミズムがこの作品を貫いていると言えるだろう。また, アジア系アメリカ人運動の内部を詳細に語ることで, アイ・ホテルが「制度化された人種主義の産物」であるとともに, 「住人たちの強さと希望」とを象徴するものであったことを提示している (Ling 169)。

このように21世紀に入って日系アメリカ文学の新しい流れも加速化されるなかで, 日系アメリカ文学のパイオニア的存在として評価されてきた二世作家の一人がヒサエ・ヤマモト (Hisaye Yamamoto) である。ヤマモトの作品は1980年代のフェミニズム批評の隆盛のもと注目され, 1988年には作品集も出版され再評価されるようになった。今もなおヤマモトの代表作はアジア系のアンソロジーに所収され, ヤマモトの多彩な世界を読み解く作業も盛んにおこなわれている。このようなヤマモトの作品を先述したように新たなアジア系アメリカ文学が登場している中でどのように位置づければよいだろうか。

小林富久子は従来の日系アメリカ文学をテーマ別に三つのグループに整理した上で, その特徴を明らかにしている (小林 182-183)。第一グループとしては, 親子の代代的対立を描くジョン・オカダやミルトン・ムラヤマ (Milton Murayama) の作品, 第二グループとして一世の夫婦間にみられるジェンダーの相克を描く作品, 第三グループとしては強制収容を描くジーン・ワカツキ・ヒューストン (Jean Wakatsuki Houston) やソネらの作品が挙げられる, と説明されている。ヤマモトもこの三つのグループでは特に第二グループを代表する作品が評価されてきた。だが, ヤマモトの作品が現在でもなお読み継がれている要因としては, それだけにはとどまらない彼女の独自性を考慮する必要があるだろう。すでに指摘されてきたようにヤマモトは日系社会の外に目を向け, 日系アメリカ人と他のマイノリティとの関係を早くから模索していた。例えば, ヤマモトは「17文字 “Seventeen Syllables”」(1949) や「ヨネコの地震 “Yoneko’s Earthquake”」(1951) において戦前のカリフォルニアの農村地帯に住む日系移民の家族に物語を設定しながら, 一方で日系家族を揺さぶる存在としてフィリピン系やメキシコ系移民を登場させ, 日系家族を他の民族や人種と交差させて複眼的な視点から日系家族物語を描いた。このような点に, ヤマシタの「グローバルな声への希求」(Ragain 139) の先達として, ヤマモトが現在でも広く読まれている理由を見出すことができるのではないだろうか。

2. シンシア・カドハタの試み

ヤマシタ以上に、ヤマモトと共振する作家として本稿でとくに取り上げておきたいのは、シンシア・カドハタ (Cynthia Kadohata) である。ヤマモトはインタビューで、アジア系で注目している若手作家としてカドハタを挙げている。1986年10月号の『ニューヨーカー』に掲載された短編、「チャーリー・オー (“Charlie O”)」を読み、そのシンプルな文体を気に入ったと彼女は語っている (Crow 81)。当時、まだ知られていなかった新進作家のカドハタにヤマモトが早くから注目している点は興味深い。

一方のカドハタは、どのようにヤマモトを捉えていたのだろうか。ヤマモトが2011年1月30日に亡くなった時、代表的な日系新聞である『羅府新報』にはヤマモトの死を悼む日系作家からの談話が多数寄せられた。ジャニス・ミリキタニ (Janice Mirikitani), ギャレット・ホンゴ (Garett Hongo), フィリップ・K・ゴタンダ (Philip K. Gotanda), ナオミ・ヒラハラ (Naomi Hirahara) などとともに、シンシア・カドハタもヤマモトは「何が可能であるかの夢を私に与えてくれた」 (*Rafu Shimpo*, “Hisaye Yamamoto: Humble Giant of American Literature”, February 11, 2011) と述べて、日系アメリカ文学のパイオニアとしてのヤマモトに敬意をこめた哀悼の言葉を寄せている。

カドハタは、『フローティング・ワールド』(邦訳タイトル『七つの月』, 1989) が『ニューヨーク・タイムズ・ブックレビュー (*The New York Times Book Review*)』やその他の書評で高く評価され、「日系のエイミー・タン」(See 48) として注目されたシカゴ生まれの日系三世の作家である。『フローティング・ワールド』は、主人公の12才の少女、オリヴィアが、奔放な祖母や不安定な関係の両親、自分自身の性や愛の目覚めなどを経験しながら成長する過程を描いた物語であり、語り手の少女が両親の葛藤や対立を観察する物語の構図は、第一章ですでに述べたように、ヤマモトの代表作にも共通してみられるものである。カドハタは2000年代に入ってから、ヤングアダルト・フィクションに転じたが、その萌芽はすでに『フローティング・ワールド』におけるオリヴィアの語りを通して予見されている。ヤマモトにおいてもそうだったように、カドハタの作品における少女は、作家としての自己形成と深くかかわっている。オリヴィアをはじめとして少女の視点を繰り返し用いてきたカドハタにとって、少女は、「作家としての主体形成の中心を担うペルソナ」(水田 183) として捉えることができる。

1950年代の日系家族を描いた『フローティング・ワールド』で注目されたカドハタは、日系作家でありながら強制収容について直接的に語っていない点が批判されたと述べている (Pearlman 117)。これを受けてカドハタは、主流社会が日系作家に期待するテーマやステレオタイプ的な日系人像への抵抗から、意識的に日系人の歴史的体験などを書くことを回避したと述べ、日系作家としてカテゴリー化され均質化されることへの反発を込めて、日系

作家の多様性を認めて欲しいと要請している (See 48)。

このように、いうなればハイフン付きの作家として読まれることを否定してきたカドハタだが、近年、作家としてのあり方に変化が見られ、初期とは異なるスタンスで作品を発表している。その変化を端的に示す作品が、2006年に出版された『草花とよばれた少女 (*Weedflower*)』である。この作品は第二次大戦中にポストン収容所に収容された12才の少女スミコ・マツダの物語である。カドハタによればこの作品は「歴史物語」であり、「9才から90才を対象とした物語」であるとして、(Lee “Interview” 183) ヤングアダルト・フィクションを超え、幅広い年代層が読める作品として捉えて欲しいと述べている。戦後生まれで自ら収容所体験を持たないカドハタが、強制収容という日系人の特別な歴史を新たな観点からとらえ直すそうと試みている点に、この作品の意義と、同時に先輩作家ヤマモトとの重要な接点を認めることができる。⁽⁵⁾

『草花とよばれた少女』の前半では、日系人への偏見が募り、学校でも辛い経験をしている戦前のスミコの状況が描かれ、第二次大戦中の強制収容へとつながる日系人への排斥感情の高まりが明らかにされている。後半では舞台がポストン収容所に移り、収容所内でのスミコの生活や、日系コミュニティの状況が描かれていく。特に注目したいのは、カドハタが強制収容の歴史を日系人のみの経験だけではなく、先住民の歴史とも交差させて描いている点である。以下、この点に焦点を置いてカドハタの試みを検討し、ヤマモトの系譜を彼女がいかに引き継いでいるかを明らかにしたい。

『草花とよばれた少女』でカドハタは、ポストン収容所が周囲から孤立した場所に設置され、砂嵐やうだるような暑さなど、砂漠地帯に特有の厳しい環境にある様子を繰り返し描いている。また、自然環境を強調するだけではなく、ポストン収容所のある南西部が「トラウマの空間」(Chen & Yu 553)であり、先住民の歴史と日系人の歴史とが交差する政治的、文化的にも複雑な場であることも徐々に明らかにしていく。

アメリカ南西部の10か所に設けられた収容所の多くは、先住民の居留地に設置され、日系人は初めて先住民と接触するようになった。ヨシコ・ウチダ (Yoshiko Uchida) の『トパーズへの旅 (*Journey to Topaz*)』(1971)でも、トパーズ収容所が設けられた土地には以前、先住民が住んでいたことを主人公のユキが思いだし、「今は干上がった湖の底に、何千人もの日本人が住んでいることを知ったら彼らはどう思うだろう」(Uchida 101)と先住民へ思いをはせる場面がある。だが、そのようなユキの思いは一瞬のものでしかなく、土地を追放された先住民に対するウチダの姿勢は曖昧なまま終わっている。この作品におけるウチダの眼差しは、土地を奪われた先住民よりも、収容所の外の世界、すなわちアメリカの主流社会に向けられているからである。収容後もユキ一家と親しかった白人家庭との友情が維持されていることが繰り返し強調されているのも、ウチダにとってユキ一家のサヴァイヴァルは、白人との良好な関係において捉えられていることを示している。

これに対してカドハタは、『草花とよばれた少女』において、アメリカの人種主義の被害

者としてのみ日系人を位置づけるのではなく、ポストン周辺の土地の歴史とも絡め、より広いパースペクティブに基づいて捉えようとしている。1830年に先住民を対象とした強制移住法を成立させると、政府は先住民との抗争を武力で制圧し、先住民を保留地に囲い込む政策を推し進めた。アリゾナ州のバーカーに近いポストン収容所が設立された当時、コロラド・リバー・インディアン保留地には、モハベ族とチェメウエビ族合わせて約1,200人が住んでおり、彼らは、最大17,804人の日系人を収容するために収容所建設に動員された。⁽⁶⁾ また、ポストン収容所は他の収容所とは異なり、連邦インディアン局が直接、建設や運営に関わっていた唯一の収容所であった。スミコは収容所でフランクと話すようになって、初めて先住民に出会い、先住民が自分たちの土地を強制的に追放され、排除されてきた歴史をもつことを初めて知らされる。そして先住民の多くが収容所の建設に反対であったこともフランクから聞いて、日系人を迎えた先住民の複雑な思いを知る。鉄条網で囲まれ、兵士たちの監視下にある収容所を「刑務所」(Weedflower 143)のように感じて、閉塞感を覚えていたスミコだが、フランクの話を聞いて、先住民から見れば自分たちも歓迎されない侵入者でしかなかったことを実感する。さらにスミコは、先住民にはいまだに投票権もなく、アメリカ市民としての権利も与えられていないこと、その多くが水道や電気もない不自由な生活をしていることを知らされる。また、物語の最後につけられた「著者注」で説明されているように、第二次大戦中は「何千人ものインディアンが、はじめて居留地を離れ、兵役や戦争に関連する仕事について」(259-60)。その結果、フランクの兄が戦場で日本兵に撃たれて亡くなったことをスミコは聞いて驚く。

このようにカドハタは、フランクとスミコの交流を通して、先住民の置かれてきた状況を前景化する。実際、ポストン収容所設立までの過程をみると、そこには土地を剥奪され、連邦政府の思うままに管理されてきた先住民の受難の歴史があらためて浮かび上がる。19世紀の中ごろ、モハベ族をはじめとする先住民と入植を始めた白人とのあいだに対立が起きた。1857年に政府は軍隊を送り、先住民勢力を制圧した。1865年、連邦議会はコロラド・リバー・インディアン居留地を設置して、モハベ族とチェメウエビ族に移住を命じた。もともと一帯は砂漠地帯であったために、居留地の灌漑整備や農地開拓は、その後のインディアン管理局が取り組まねばならない大きな課題だった。長い時間をかけてその作業が進められたが、実現に至るまでは多くの困難や停滞がつきまとった。このような状況下で、インディアン管理局は強制収容される日系人の労働力に期待をかけ、灌漑事業や農地開拓を進めようとする意図を最初から持っていたのである。インディアン管理局にとって、収容所建設は居留地の農地化を図るうえで効率的で都合のよい選択だった。以上のように、先住民の強制移動も日系人の強制収容も、ともにアメリカ政府の人種主義に基いて計画され、実行されたものだった。⁽⁷⁾

このようなコロラド・リバー居留地の歴史を投影して、『草花とよばれた少女』では、土地が重要なモチーフとして繰り返し用いられている。早くに両親を交通事故で失い、花農家

を営む叔父夫妻のもとで育ったスミコは、将来は花屋になりたいと思っている。学校で「土」と題された作文を書くほど草花が好きなスミコは、友達からも「草花」と呼ばれてからかわれてもいる。強制収容の日が近づいて叔父の農場を去る時も、農園に咲き乱れる花を案じて断腸の思いでスミコは農園を去る。『また、物語において繰り返し強調されているスミコの草花に対する強い愛着心を、戦前の日本人農民の土地との関係を通して捉えると、複雑な様相を帯びてくる。戦前の日本人農民はさまざまな制約と困難な中で、借地による農業を営んでいた。⁽⁸⁾ 強制収容は彼らが築き上げてきたものを一気に崩壊させたことは、叔父一家の運命を通してこの作品でも確認される。一方、今しがたも述べたように、先住民にも自分たちの土地を略奪され追放された長い歴史があり、収容所建設は先住民と日系人がともに不可視化された存在であることを象徴するものだった。フーチェンとスーリンユ (Fu-Jen Chen and Su-Lin Yu) は、強制収容を描いた日系文学において強制収容の経験を詳細に描く作品がほとんどで収容所の多くが設立された南西部という場所に根差した作品がないため、南西部が差別と排除に基づく「複合的なトラウマの場」(Chen and Yu 565)であることが見逃されてきたという。このような指摘を踏まえると『草花とよばれた少女』におけるカドハタの試みがこれまで強制収容について書かれてきた児童文学やヤング・アダルトフィクションとの差異が改めて確認されることになる。

カドハタは、フランクに対するスミコの初恋にも似た淡い感情を描くことで、マイノリティ間における相互理解の可能性を見出している。フランクはスミコと言葉を交わすようになった当初、日系人への不信感や猜疑心をあからさまに示し、スミコを困惑させる。だが、やがて日系人の労働によって収容所内に水がひかれ、荒地も緑豊かな農地に変化する過程で、フランクの態度にも変化が見られる。将来農業を志しているフランクは、スミコの従兄ブルから畑作について学び、未来への希望を見出すことができるからである。収容所内で「庭づくりの哲学者」(*Weedflower* 251)とよばれるほど花好きなスミコも参加して、日系人が協力し合って作り上げた農地は「著者注」(259-60)においても触れられている通り、日系人が収容所から解放された後は、フランク兄弟ら先住民に引き継がれ、「豊かな農地」(290)に生まれ変わったと書かれており、収容所での日系人の農作業が、先住民の生活の向上につながったことが示されている。

だが、一方でカドハタは、日系人と先住民のあいだの連帯について、明るい展望を見出すだけで終わっているわけではない。両者には土地の喪失という共通性があるながらも、さまざまに埋めがたい距離がある事情にもカドハタは目を向けていく。まず第一に、日系人も先住民も主流社会が抱えている偏見を内面化し、互いに互いを差別をしている点である。日系人が先住民を危険で野蛮な存在とみなして偏見を持っていることは、一世の親が先住民との接触を禁止していることからうかがわれる。例えば、スミコの友人であるサチは、先住民が暴力的で危険な存在であることをスミコに強調して、先住民の姿が見えるとただちに逃げ去ってしまう。また、先住民のほうも日系人を「ジャップ」と呼んで差別的な感情を露骨に示

す。先住民の高校生と日系人のバスケット・ボールの試合が収容所で行われた時も、試合後に先住民の選手と話していた日系人の女の子をめぐって、チーム間で一触即発の状況になる場面には、日系人と先住民との交流の難しさが端的に示されている。

アメリカ社会で不可視化された歴史を共有しながらも、相互に偏見と差別を抱き、共感や相互理解を深めることが容易ではないことが、これらの出来事から察せられる。物語の最後でスミコは、収容所から解放されることになった時、フランクと会えなくなることを寂しく感じ、収容所にとどまりたいとすら思う。だが、フランクは自分の未来はポストンの地にあるが、スミコの未来は収容所の外にあることを告げて、スミコを送り出す。このフランクのアドバイスは自分たちと日系人との社会的差異を感じ取っているフランクの現実に根差した結論だった。実際、日系人は強制収容所から解放されて新たな生活の再建へと向かう一方で、フランクたちは保留地に留まり、そこでの生活を受け入れるしかないという現実があるからである。このような先住民と日系人の社会的差異を踏まえた上でのカドハタの現実的な認識が、物語の結末には投影されていると思われる。

3. カドハタ『草花とよばれた少女』とヤマモト「エスキモーとの出会い」

以上のように、作家としてデビューした当時のスタンスを変え、21世紀に入って収容所体験を初めて語ろうとしたカドハタの試みには、現代のアメリカにおいてもなお周縁化されているアジア系アメリカ人の子どもたちの未来を見据えているカドハタの強い思いを感じ取ることができる。過去を掘り起こすことは、カドハタにとって「現状を変革し、新しい未来を想像する」(ヨネヤマ 241) 行為であり、マイノリティの子どもたち同士の共感や理解に、カドハタがアジア系の子どもたちの未来を託して、日系人の強制収容という特異な歴史を捉え直したことが改めて了解される。

このようなカドハタの試みに通じる作品として、取り上げたいのは、ヒサエ・ヤマモトの「エスキモーとの出会い “The Eskimo’s Connection”」(1983) である。この作品は日系二世女性とアラスカのエスキモーとの文通物語であるが、カドハタの『草花とよばれた少女』と深く共振しあう作品として捉えることができる。

この作品でヤマモトは、強制収容について直接的な言及はしていないが、エミコの収容所生活についてごく短く触れている箇所がある。オールデンから自身の作品へのコメントを求められたエミコは、創作者へのコメントは注意深く行わなければならないと考える。収容所にいたころ、「創造的な仕事に携わっている人々には、なんともし心が宿っているかを知った」(Yamamoto, *Seventeen* 98) からである。エミコがどこの収容所にいたのかは不明である上に、収容所でのエミコの経験もこれ以外には一切、触れられてはいない。だが、ヤマモトがオールデンの移送先を、マックニール・アイランド刑務所としている点に注目したい。同刑務所は主として兵役を拒否して、当局に嫌疑をかけられた日系人が隔離収容された

刑務所でもあったからである。エリック・L・ミュラーによると、1944年7月および10月にミネソタ収容所から合計63名の日系人が移送されて収容された(Muller 161)。この事実を踏まえると、ヤマモトが刑務所内で混迷を深めるオールデンに、エミコ自身の収容所体験を重ね合わせながら語りを進めていることに気づかされる。

エミコが刑務所に対して懐疑的であり、その規則や管理体制に疑義を呈している点などは、刑務所と収容所とを重ね合わせる工夫の一例であろう。また、エミコはオールデンがどのような犯罪を犯して刑務所に入ったのかその経緯についてはあえて聞かないし、知ろうともしない。せいぜいオールデンは「文書偽造」で拘留されているのだらう、と想像するだけである。物語の最後に挿入されるオールデンの短編物語には、トラウマ的経験が暗示されているが、残忍な殺人事件を犯した物語の主人公がオールデン自身であるとエミコが確信しているわけでもない。自らも詩人であるエミコは、この物語をオールデンの心象が暗喩化されたものとして捉えているからだ。このようにヤマモトがあえてオールデンの罪を曖昧にしたのは、ウーが指摘するように、マックニール・アイランド刑務所に隔離収容された日系人に対する当局の猜疑心や嫌疑が、実際は根拠も曖昧で人種主義に基く偏見でしかなかったことを、ヤマモトが暗に示しているからであるように思われる(Wu 10)。

こうして、カドハタの『草花とよばれた少女』とヤマモトの「エスキモーとの出会い」は、ともに先住民の歴史と日系人の歴史を交差させ、過去を新たな視点から捉えなおす試みとして注目される。両者は、近年の先住民文学とアジア系文学の比較研究の一例として、示唆的なものとも言えるだろう。

だが、ウーは両文学の比較について、一定の留意すべき問題もあると指摘している。ウーによれば、先住民とアジア系の歴史は大きく異なり、「非白人」とであるという観点のみでは両者の比較には限界があるという。また、「永遠の外国人」と捉えられてきたアジア系と「高貴な野蛮人」としての先住民のアメリカにおける社会的位置づけにも差異があるため、この点を踏まえた比較検討が必要であると論じている(Wu 12)。言うまでもなく、「モデル・マイノリティ」として捉えられてきたアジア系と「同化不能な異教徒」として他者化されてきた先住民との経済的、社会的格差も見逃せないはずである。このような現実をヤマモトが十分に認識していたことは「エスキモーとの出会い」においても明らかだろう。この作品でエミコはオールデンの置かれた状況が深刻なものであることに共感を示しつつも、エミコのできる範囲で冷静に応答を繰り返している。オールデンが最後にエミコに送ってよこした物語では、アラスカのエスキモーを取り巻く厳しい状況や貧困の問題を暗示され、アラスカに戻ったことが示唆されるオールデンの行く末も曖昧なまま物語はとじられている。文通を通してエミコとオールデンとのあいだに生じた相互信頼や共感、将来につながる可能性を予感させるものではあるが、両者がついに対面することもなく、文通も自然に消滅していく点に、ヤマモトは、日系人であるエミコとエスキモーのオールデンとの距離が、容易には克服されないものであることを示唆している。

オールデンへの共感と距離感という両義的な感情を抱くエミコを通して示されるヤマモトの見方は、カドハタのそれとも通じるものである。カドハタも『草花とよばれた少女』において、スミコとフランクの関係に希望を託しながらも、収容所を出ていくスミコと保留地に留まるフランクとの差異を最後に明示することで、人種主義や社会的不正義によって抑圧されてきたマイノリティ間の共感や連帯の成立にともなう困難を十分に認識していると思われる。この点に世代も経験も異なる二人の作家が時代を超えて共振しあう存在であることが理解されるだろう。また同時に、21世紀に入って書かれたカドハタの『草花の少女』を通して、日系アメリカ文学のバイオニアとしてのヤマモトの先見性をあらためて見出すことが可能となるのではないだろうか。

*本稿は平成29年度—30年度科学研究補助金（挑戦的研究 萌芽）（課題番号17K18488）による成果の一部である。

〈注〉

- (1) 『ギドラ』は当時、UCLAの学生であった日系三世のグループが中心となって発行された月刊新聞であり、1969年から1974年まで発行された。日系人の強制収容やその後の問題からベトナム戦争などに至るまで活発な議論がなされた。『ルーツ』はアジア系移民の歴史やコミュニティについてエッセイや論文が掲載され、アジア系アメリカ研究のテキストとして使用された。『カウンターポイント』はアジア系アメリカ研究の動向や書評、エッセイ、文学作品などが取められ、アジア系アメリカ研究の包括的な入門書でもある。
- (2) それまでの国別割り当て制度が廃止され、西半球出身者と東半球出身者という大まかな枠で移民数を決定した。また、特別な技能を持った人材を積極的に受け入れた。この法でヨーロッパからの移民の比率は低下し、アジアやラテン・アメリカからの移民が急増した。Kitano, 18-19.
- (3) アイ・ホテルの歴史や撤去運動についてはMaeda 58-64を参照。
- (4) 1968年はアメリカ社会においては特に激動の年であった。1月にはテト攻勢がありベトナム戦争の転換期となった。また、4月に非暴力主義を貫いていたキング牧師が暗殺されアフリカ系アメリカ人は指導者を失った。当時、多感な時期を迎えていたヤマシタにとってこれらの出来事が大きな影響を与えたことが『アイ・ホテル』の時代設定からも推察される。
- (5) カドハタは作家になりたての時期に編集者からアジア系もしくは日系のステレオタイプ像に沿って書くことを求められて困惑したことに触れて、「アジア系作家が触れてはならない主題などないはずだ」と述べてアジア系作家としての創作に伴う不自由な状況に異議申しだてをしている。Kadohata, "Introduction." Lori M. Carlson, *American Eyes: New Asian-American Short Stories for Young Adults*, xvi-xvii.
- (6) ヤマモトは、強制収容は日系作家が直接的にあるいは間接的に書くかどうかはともかく、日系作家の知性に刻まれた出来事であり、真摯な日系作家の作品には「このユニークで悲惨な経験を斟酌したことを反映する要素」が必ずや見られるとして、世代を超えて日系作家が継承する出来事であったとしている。（“...I Still Carry It Around.”, 19）
- (7) 収容所の名前がポストンとなったのは、「アリゾナの父」と呼ばれこの一帯の開拓を進めたチャールズ・ポストンへの敬愛の念から命名されたのであったとされる。Paul Bailey 63. また、ポストン収容所の設立までの過程を先住民の歴史と交差させた論文としては以下を参照。石山

- 徳子 「コロラド・リバー・インディアン居留地の農地開拓と日系人労働：ポストン収容所の地理空間」『立教アメリカン・スタディーズ』第30号，2008年。135-152。ポストン収容所の歴史については以下を参照。Bailey, Paul. *City in the Sun: The Japanese Concentration Camp at Poston, Arizona*. Los Angeles: Westernlore P, 1971.
- (8) カリフォルニア州では日本人移民が農業に進出するようになると反発を買い，様々な制約が課せられるようになった。1913年に制定された「カリフォルニア州外国人土地法」(“California Alien Land Law”)により市民権取得資格のない(=帰化不能)外国人の土地所有や3年以上の貸借が禁止された。このため日本人移民は小作農として転々と土地を移動する以外に暮らしを立てる方法がなくなってしまった。この法律はさらに，1920年に修正法が制定されると，借地契約が全面的に禁止され，日本人農民への制約はより一層，強化された(Ichioka 243)。

引用文献

- Chen, Fu-Jen, and Su-Lin Yu, “Reclaiming the Southwest: A Traumatic Space in the Japanese American Internment Narrative.” *Journal of the Southwest* 47.4 (Winter, 2005): 551-70.
- Chu, Patricia. *Assimilating Asians: Gendered Strategies of Authorship in Asian America*. Durham: Duke UP, 2000.
- . and Roger Daniels. *Asian Americans: Emerging Minorities*. Second Edition. Englewood Cliffs: Prentice Hall, 1995.
- Crow, Charles L. “A MELUS Interview with Hisaye Yamamoto.” *MELUS* 14.1 (Spring, 1987): 73-84.
- Ichioka, Yuji. *The Issei: The World of the First Generation Japanese Immigrants, 1885-1924*. New York: Free P, 1988. 富田虎男他訳『一世——黎明期カリフォルニアの物語』刀水書房，1992年。
- Kadohata, Cynthia. “Introduction.” Lori M. Carlson, ed., *American Eyes: New Asian-American Short Stories for Young Adults*. New York: Fawcett, 1994. xv-xvii.
- . *Weedflower*. New York: Simon and Schuster, 2006. 代田亜香子訳『草花とよばれた少女』，白水社，2006年。
- Lee, Hsiu-chuan. “Interview with Cynthia Kadohata.” *MELUS*, 32.2 (Summer, 2007): 165-86.
- Ling, Jinqi. *Across Meridians: History and Figuration in Karen Tei Yamashita's Transnational Novels*. Stanford: Stanford UP, 2012.
- Maeda, David Joji. *Rethinking the Asian American Movement*. New York: Routledge, 2012.
- Muller, Eric L. *Free To Die For Their Country*. Chicago: U of Chicago P, 2003.
- Pearlman, Mickey. *Listen to Their Voices: 20 Interviews with Women Who Write*. New York: Houghton Mifflin, 1993.
- Ragain, Nathan. “A Revolutionary Romance: Particularity and Universality in Karen Tei Yamashita's *I Hotel*.” *MELUS*, 38.1 (Spring, 2013): 137-52.
- See, Lisa. “PW Interviews: Cynthia Kadohata.” *Publishers' Weekly*, August 3, 1992. 48-49.
- Uchida, Yoshiko. *Journey to Topaz: A Story of the Japanese American Evacuation*. 1971. rpt. Berkeley: Heyday Books, 2005.
- Yamamoto, Hisaye. “...I Still Carry It Around.” *RIKKA*, 3.4 (1976): 11-19.
- . *Seventeen Syllables and Other Stories*: Revised and Expanded Edition. Ed. King-Kok Cheung. New Brunswick: Rutgers UP, 1998. 山本岩夫・桧原美恵訳『ヒサエ・ヤマモト作品集——「十七文字」ほか十八編』南雲堂フェニックス，2008年。
- Yamashita, Karen Tei. *I Hotel*. Minneapolis: Coffee House P., 2010.
- Yogi, Stan. “Japanese American Literature.” King-Kok Cheung, ed., *An Interethnic Companion to*

Asian American Literature. New York: Cambridge UP, 1997. 125-55.

Wu, Cynthia. "A Comparative Analysis of Indigenous Displacement and the World War II Japanese American Internment." *Amerasia Journal*, 42: 1 (2016): 1-15.

小林富久子 『ジェンダーとエスニシティで読むアメリカ女性作家——周縁から境界へ』 学藝書林, 2006年。

石山徳子 「コロラド・リバー・インディアン居留地の農地開拓と日系人労働——ポストン収容所の地理空間」 『立教アメリカン・スタディーズ』 第30号, 2008年。135-52。

水田宗子 『二十世紀の女性表現——ジェンダー文化の外部へ』 学藝書林, 2002年。

Hisaye Yamamoto as a Pioneer Japanese American Writer

Taeko I. Hiraishi

Hisaye Yamamoto's works have been widely read particularly since the publication of *Seventeen Syllables and Other Stories*, a collection of her works in 1988. Most of the reviews and studies about her have mainly focused on the significance of gender, Japanese American culture and hybrid identity. However, it should be noted that many recent studies on Yamamoto have shifted to an analysis of an interracial solidarity in her works. One such work is "The Eskimo Connection." Although it has not been fully examined by scholars, a reading of "The Eskimo Connection" will surely lead us to recognize that Yamamoto had a sharp insight into the possibilities and limits of interracial and interethnic relationships among US minorities. The aim of this paper is to point out the significance of "The Eskimo Connection" by comparing it with Cynthia Kadohata's *Weedflower* and to examine Yamamoto's influence on such a postmodern writer as Kadohata.

"The Eskimo Connection" and *Weedflower* are similar in that they deal with relationships between Japanese Americans and Native Americans. "The Eskimo Connection" (1983) is a fictional narrative about correspondence between a young incarcerated Native American man, Alden, and an older Japanese American woman, Emiko. Although Emiko is, at first, hesitant to respond to Alden when he asks her to give him some comments on an essay he has written, she finally decides to answer his request, and starts a two-year correspondence with him. Emiko begins to understand his inner sufferings and to sympathize with him because his situation reminds her of her internment experience during World War II.

Kadohata's *Weedflower* (2006) is set at Poston internment camp during World War II. Sumiko, a 12-year-old Nisei girl, happens to meet Frank, a Mohave boy, at the camp. At first they both feel anger toward each other, until Sumiko learns from Frank that Native Americans have been denied civil rights like Japanese Americans. Subsequently they begin to feel empathy with each other when they come to know that Japanese Americans and Native Americans share a common history of losing their lives and their places in society because of racism.

Although the two stories were published more than twenty years apart, there appear to be deep resonances between Yamamoto and Kadohata. Both show that coalitional relationships across racial lines are sometimes necessary, but at the same time they also suggest that there exist social boundaries and restrictions which are difficult to overcome because Japanese Americans and Native Americans have different histories and different social locations in American society. "The Eskimo Connection" definitely reveals that Yamamoto predicted the limitations of cross-racial collaborations in contemporary multiracial America.